夏目漱石の社会思想
―とくに『草枕』の場合―

倉田　稔

目　次

はじめに
1　『草枕』のテーマ
2　近代個人主義
3　漱石文学全体と『草枕』
むすび

はじめに

小説『草枕』は，夏目漱石が熊本を題材にして書いたものである。

夏目漱石（1867－1916）は，明治二九年（一八九六年）四月，二九才で第五高等学校（現在の熊本大学）の講師として，熊本に赴任した。そして同年七月に教授になった。彼は，熊本在任中，明治三三年（一九〇〇年）九月に，英文学研究の目的で，二か年余の英国留学をするために，日本を出発し(1)，明治三六年（一九〇三年）一月に帰国した。そしてその年三月，熊本の第五高等学校を辞し，第一高等学校と東京帝国大学で英語英文学を教えることになり，東京へ戻った(2)。

（1）この時，三人が留学した。他の一人は，瀧廉太郎で，後の小樽高商初代校長渡辺龍聖が推薦した。

（2）夏目漱石について，その研究は無数であるが，次をあげたい。小宮豊隆の伝記（下記注にある），漱石夫人・夏目鏡子の述による『漱石の思い出』，江藤　淳氏『漱石とその時代』第1・2部（新潮選書），ユニークである土居健郎『漱石文学における「甘え」の研究』（角川文庫）などである。『草枕』の舞台になった土

漱石は，実質四年余，熊本に滞在・勤務していた。そのうち，『草枕』の舞台になる地を旅行したのは，明治三〇年暮れから翌年の正月にかけてである。友人・山川信次郎と共に，熊本県玉名郡玉水村の小天（おあま）温泉に滞在した。漱石がここを二度訪れたという説があるが，これは一度きりのことだったと，小宮豊隆[3]は書く。漱石は，この時の体験をもとに，明治三九年（一九〇六年）九月に，「草枕」を『新小説』に発表したのであった。

漱石は，その前年の明治三八年（一九〇五年）に，『我輩は猫である』（前編）を発表している。その翌年，『草枕』を出した年，つまり明治三九年には，『坊っちゃん』，『我輩は猫である』（中編），を発表した。翌・明治四〇年（一九〇七年）には，一切の教職を辞し，つまり東京帝大教授の職を投げうって，朝日新聞社に入社し，職業的作家になった。彼は創作家になりたかったからである。そして，『我輩は猫である』（下編）を発表した。

『草枕』は，漱石にとっては，時期の点だけで言えば，初期作品にあたっている。仮に，漱石のこの時期の小説類を，初期と名付けるとして，『猫』，『坊っちゃん』，『草枕』を代表的作品とすると，諧謔的[2a]諸作品の時代と言える。熊本で小旅行をしてから，八，九年後に，彼はこの小説『草枕』を発表したのであった。漱石は，この小旅行の体験をあたためていた。

1　『草枕』のテーマ

『草枕』は，余裕派（職業はなく，しかし生活の資産はある人々を主人公にした）の小説ではなく，素朴な余裕派，あるいは余裕派の先駆けを主人公にした小説である。というのは，主人公が画家であり，すなわち職業を持っているから，実際は余裕派ではないのであるが，小説ではこの主人公は，遊山

地と漱石とについては，島　為男『夏目さんの人及思想』（日本図書センター　1990年）を見よ。

（2 a）及川清説。

（3）小宮豊隆『夏目漱石』中，岩波文庫　1987年，34ページ。

に来ているので，職業がない人とほとんど同じである。この点は，『我輩は猫である』の登場人物にも似ている。

『草枕』のテーマは，芸術である。より具体的に言えば，主人公の「余」は，画工＝画家であり，だから芸術といっても絵画がテーマである。こうして『草枕』の本題は，芸術なのだが，漱石は，芸術を非人情の世界で成り立つとしている。非人情とは，不人情ではない。人間の世の中からの解脱であり，出世間でもある。「出」世間というのは，世間から出るという意味である。世間から出たところに芸術がある，と漱石は主張する。「住みにくき世から，住みにくき煩(わずら)いを引き抜き，有難(ありがた)い世界をまのあたりに写すのが詩である，画である。ある（い）は音楽と彫刻である。」(4) と芸術論を述べる。ついで，「これ（前後関係から言うと，詩）がわかる為めには，わかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。」(5) とも言う。

漱石は，学者時代に書いた『英文学形式論』(6) で，すでに芸術相対主義に立っている。つまり，どの国の芸術（彼が主に研究したのは，詩である）がすぐれているかは，決められないとする。芸術については，国によって人々の趣味は違う。そして芸術とは趣味の問題であるからである。漱石のこの議論は正しい。イギリス文学で，漱石が好いと思うものが，必ずしもイギリス人に好いとは思われないのであった。そしてイギリス人が好いという作品が，漱石にとって，必ずしも好いものだとも思われないのであった。イギリス留学中で，またその直前の時期に，この問題を抱えて，漱石の文学研究者としての立場，そして彼の抱えた問題は，大きなものであった。漱石の講演「私の個人主義」では，こう言う。「たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか，口調が大変好いとかいっても，それはその西洋人の見る所で……私にそう見え

（4）『草枕』新潮文庫，1996 年，6 ページ。；『夏目漱石全集』岩波書店（以下，『全集』と略），では，第二巻所収。
（5）同，11 ページ。（　）内は，引用者の補い。
（6）『全集』第十六巻。

なければ，到底受売りをすべきはずのものではない……。私が一個の日本人であって，決して英国人の奴婢でない以上はこれ位の見識は国民の一員として具えていなければならない……」[7]。『草枕』では，実際に，漱石は東洋芸術・日本芸術に傾いている。一方で，前述の「出世間」主義の立場から，西洋の詩を批判している。「ことに西洋の詩となると人事が根本になるから所謂詩歌の純粋なるものもこの境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか，正義だとか，自由だとか，浮世の勧工場にあるものだけで用を弁じている。いくら詩的になっても地面の上を駈けあるいて，銭の勘定を忘れるひまがない。」[8] その上，漱石は，当時の西洋かぶれを批判している。彼はこの小説中で，「惜しい事に今の詩を作る人も，詩を読む人もみんな，西洋人にかぶれているから，……」[9] と書く。

小説は，正確に言えばロマン＝長編小説は，普通，ストーリー（話の筋）が波瀾万丈であるほうが，小説らしい。その点で，一九世紀のフランスの小説は最高である。アレクサンドル・デュマ（1802－70）やヴィクトル・ユーゴー（1802－85）の長編小説はその代表である。『モンテ・クリスト伯』や『レ・ミゼラブル』を思い起こせるだろう。スタンダール（1783－1842）の小説もそうである。これらは，手に汗握るストーリーであり，涙を流す物話である。この点からいうと，日本の小説や漱石の小説には，波瀾万丈のストーリーあるいはプロット（＝筋）があるものは少ない。もっとも，日本にもそれらがないわけではなく，滝沢馬琴（1767－1848）の『南総里見八犬伝』や中里介山（1885－1944）の『大菩薩峠』などは，それである。現代では，辻邦生の『背教者ユリアヌス』はヨーロッパ的長編小説である。だがこれらのようなものは概して少ない。

（7）「私の個人主義」（『漱石文明論集』岩波文庫　1996年）113ページ。；『全集』では，第十一巻所収。
（8）『草枕』11～12ページ。
（9）『草枕』12ページ。

漱石の小説で，筋がはっきりしているのは，『坊っちゃん』や『こころ』である。『坊っちゃん』にはストーリーがあるが，それほど波瀾万丈ではない。『草枕』にはストーリーがほとんどない。あるいは，ないように見える。ただしストーリーがないことについて，談話「余が『草枕』」で，小説『草枕』の目的を述べた文（本稿で少し後に引用しておく）のすぐ後に，漱石は反論している。「さればこそ，プロットもなければ，事件の発展もない。」(10) これと関係する問題だが，日本の小説には，私小説が多い。漱石にもそれがある。『草枕』も，ストーリーの点からいうと，ほとんど私小説である。漱石が体験した物語が基本になっているからである。『坊っちゃん』でさえも，そうである。『我輩は猫である』は，もっと私小説的である。その後，『道草』，『行人』を除けば，漱石は私小説から離れる。小説が私小説になると，いきおいストーリー性は減少する。だが，波乱万丈のストーリーがなくても，漱石の小説は，代表的日本人の心情を描いている。したがって，彼の小説は日本人によく読まれ，愛され，共感されたのであった。彼の文学のすぐれていたのは，人間の精神・観念・心理の描写においてであった。人間のそれといっても，日本人の精神・観念・心理である。精神・観念・心理の世界は，実際は，人間にとって生活の中心であるから，重要なのである。それにまた，ある意味で，『草枕』は漱石的文学の端緒的作品である。観念世界を描いているからである。

当時の日本文壇では，自然主義小説が勃興していた(11)。漱石は，しかしこれに反発していた。その上に彼は，自然主義でない独特の文学も十分成り立つだろうと考えた。『草枕』はその試みでもある。漱石は，こう書く。「私の『草枕』は，この世間にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯一種の感じ ── 美しい感じが読者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。」（現代漢字にした）(12)

(10)「余が『草枕』」（『全集』第一六巻，岩波書店）544ページ。
(11) 伊藤整『日本文壇史』講談社。
(12)「余が『草枕』」同。

『草枕』は，漢語が多いが，それをふんだんに駆使し，論じている部分が多くある。これは，自然主義文学への抵抗でもあった。言葉の豊富さを，漱石は用いた。こうして，多彩な漢語使用によって，この小説は絢爛な感じを与えている。ただし，泉鏡花のような美の世界ではない。

『草枕』の筋＝ストーリー自体は，簡単である。画工（＝余）が，那古井温泉場（架空の名，実際は小天温泉）に湯治に行き，志保田家（架空の名，実際は熊本県の旧財産家の前田案山子家）に逗留した。客は彼一人だけであった。そこで，その家の娘・那美（架空の名，実際は前田ツナ）に会った。小説中では，ここへ来る途中に，峠の茶店に寄り，また宿に着いてからは，和尚さんと話をし，床屋に行く，などのエピソードがある。

『草枕』で出てくる情景描写は，かならずしも，彼の旅行した小天温泉の情景ではない。漱石が他に九州旅行をした時の情景を，ここに利用している場合がある。というのは，実際に漱石が旅をしたのは冬であるが，『草枕』での情景は春だからである。

この小説『草枕』の結論は，簡単に言えば，最終部の一文にある。ヒロイン那美は，画工に自分の絵を画いてくれと言っている。だがその時，画工は画くことができなかった。やがて，彼らは駅に人を見送りに行く。那美の別れた元の夫も，駅から出発する。その際，

「那美さんは茫然として，行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いている。

「それだ！　それだ！　それが出れば画になりますよ」

と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就したのである。」(13)

つまり，芸術のなりたつ条件を，漱石は小説化したのであった。

---

(13)『草枕』169ページ。

2　近代個人主義

漱石は，その多くの小説で，近代個人主義を大きなテーマにした。しかし日本には民主主義，個人主義がない。漱石の生きた明治時代では，なお一層のことであった。社会とは，確立した個人の総体である。しかし日本には個人がない。あるいは個人はしっかり確立していない。したがって日本では，個人が作るはずの社会がない。あるのは世間ばかりである。

「世間」については，最近，阿部謹也氏が興味深い研究を出している。氏は，この日本独特の「世間」を定義する。「世間とは個人個人を結ぶ関係の環であり，……個人個人を強固な絆で結び付けている。しかし，個人が自分からすすんで世間を作るわけではない。何となく，自分の位置がそこにあるものとして生きている。世間には，形をもつものと形をもたないものがある。形をもつ世間とは，同窓会や会社，政党の派閥，短歌や俳句の会，文壇……大学の学部，学会などであり，形をもたない世間とは，隣近所や，年賀状を交換したり贈答を行う人の関係をさす。……世間には厳しい掟がある。それは特に葬祭への参加に示される。その背後には世間を構成する二つの原理がある。一つは長幼の序であり，もう一つは贈与・互酬の原理である。」(14)

日本人には，あるいは日本には，近代ヨーロッパでいう個人主義がなく，その代わり集団主義がある。日本では，個人は集団に埋没する。その集団というのは，世間である。この日本とヨーロッパとの差異・区別は，善い悪いの問題ではない(15)。

「日本社会」，つまり世間は，「甘い」社会(16) であり，人情の世界であり，ギ

---

(14) 阿部謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書　1995 年，16～7 ページ。この書の第五章には，漱石論もある。

(15) もちろんヨーロッパでも，テンニエスの描く，ゲマインシャフトの社会がある。つまり，親子・家族・友人の「本質共同社会」である。(参考，フェルディナント・テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』上下，岩波文庫。)

(16)「甘え」の社会と見ることもできる。土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂　1971 年を参照。

スギスしていない。理性の世界ではなく，論理で動く社会ではない。なお，漱石は，社会，世間，世の中という言葉を使うが，それも余り区別していない。阿部は，漱石が社会と世間とを区別しえなかったのである，と論ずる。

日本ではせいぜい，「余裕」の人々にしか，個人はない。この環境での，この状況での，個人主義の葛藤を，漱石は，彼の文学で描き，追求した。

さて，個人主義と個性とを，漱石は区別していない。この二つは違うものである。個人主義とは，政治的・哲学的概念であり，個性はむしろ心理学的概念である。個人主義は，ヨーロッパにあり，キリスト教的・近代民主主義的なものである。個性というのは，どこの社会にもある。それぞれ人間には多かれ少なかれ，個性がある。

イギリス留学中，漱石は，彼の言う「自己本位」の立場で勉強した(17)。帰国後，漱石はそれを論ずる。「自分の個性が発展出来るような場所に腰を落ち着ち付けべく」(18)，というのが彼の個人主義であった。「ああ此処におれの進むべき道があった！　漸く堀り当てた！　こういう感投詞(ママ)を心の底から叫び出されるとき，あなたがたは始めて心を安んずる事が出来る」(19)。「どんな犠牲を払っても，ああ此所だという堀当てる所まで行ったら宣かろうと思うのです。」そして彼は，自由についても言う。「要するに義務心を持っていない自由は本当の自由ではない」(20)。「個人の自由は……個性の発展上極めて必要なものであって，その個性の発展がまた貴方がたの幸福」になる，と説く。あるいは，「個人の幸福の基礎となるべき個人主義は個人の自由がその内容になっている……」(21) と，漱石は信じている。ひるがえって彼はまた，他人の個性も認めよう，と言う。漱石は，講演「私の個人主義」の途中までの三つの結論の第一としてこう言う。「自己の個性の発展を仕遂げようと思うなら

(17)「私の個人主義」(『漱石文明論集』岩波文庫　1996年) 114ページ。
(18) 同，123ページ。
(19) 同，118ページ。
(20) 同，129ページ。
(21) 同，133ページ。

ば，同時に他人の個性も尊重しなければならない。」[22]と。

3　漱石文学全体と『草枕』

『草枕』のテーマが小説『草枕』の最終の文にある一方で，漱石文学全体のモチーフが『草枕』の冒頭にある。

熊本での小旅行から小説の発表までの漱石の重大経験は，英国留学である。またもちろん，その間の文学研究でもある。漱石は，長い英国留学で，近代社会を体験した。ヨーロッパには個人主義があり，これにはキリスト教と関係がある[23]という説がある。オランダと並んで近代ブルジョア民主主義革命をしたイギリスは，近代民主主義国家として，存在していた。一七世紀のピューリタン革命と名誉革命とに始まる長い民主主義の伝統を持つイギリス，そこに漱石は留学したのだ[24]。彼はヨーロッパの個人主義を知った[25]。漱石のヨーロッパ理解はなかなかのものである。例えば，西洋の開化は内発的であって，日本の現代の開化は外発的である，などと，卓見を述べている[26]。

だが漱石は，ヨーロッパの個人主義の良い面を知ったと同時に，一方で，それにかぶれることはなかった。個人主義の反面をも，確かにさとった。『草枕』で漱石は，文明社会を批評する。「文明はあらゆる限りの手段をつくして，個性を発達せしめたる後，あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付け

---

(22) 同，127ページ。その他の二つは，これである。権力を使用するとき，義務を心得ること。金力を示そうとするとき，責任を重んじること。
(23) 阿部氏は，個人主義の成立を，ラテラノ会議，つまり中世キリスト教の懺悔の確立，に見ている（小樽商大での講演より）。
(24) 留学時代について，日記，書簡以外に，「倫敦消息」二つ，「自転車日記」（『全集』第十二巻）を見よ。その後に書いた小品としては，「倫敦塔」「カーライル博物館」（ともに，『全集』第二巻，所収）がある。
(25)「私の個人主義」127～128ページで，彼はイギリスの自由について論じている。
(26)「現代日本の開化」（『漱石文明論集』岩波文庫　1996年）26ページ。；『全集』では第十一巻。

様とする。……」[27] これは近代主義であると同時に，現代主義である。近代を超克している。最近流行のポスト・モダンの思想（絶対の真理や道徳はない，という考え）よりも，その思想，漱石の思想は，はっきりしているし，力強い。

さらに漱石は，この個人主義をもっと具体的に論ずる。「一人前何坪何合かの地面を与えて，この地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよと云うのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵を設けて，これよりさきへは一歩も出てはならぬぞと威嚇かすのが現今の文明である。」これは，私有財産的近代ブルジョア社会である。「何坪何合のうちで自由をほしい擅にしたものが，この鉄柵外にも自由をほしい擅にしたくなるのは自然の勢いである。憐れむべき文明の国民は日夜にこの鉄柵に嚙み付いて咆哮している。文明は個人に自由を与えて虎の如く猛からしめたる後，これを檻穽の内に投げ込んで，天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて，寝転んでいるのと同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら――世は滅茶滅茶になる。第二の仏蘭西革命はこの時に起るのであろう。」[28] 漱石はなお，ヨーロッパで個人主義の革命が進んでいることに触れ，それをイプセン[29] に求めている。たぶん，『人形の家』を念頭に置いているのであろう。ただし残念ながら，『草枕』では詳述されていない。

『草枕』の冒頭は，誰もが知るように，次である。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」日本人がよく揮毫する「智情意」がここに並んでいる。ただし，最後の「意地」は，普通は「意志」だから，すこし意味が違う。『草枕』を全編読んだ人も，一部しか読まなかった人も，この冒頭の句は知っている。智をもとに行動すれば，日本ではカドが立つ。それでは，智を捨てて，情によって生活す

(27)『草枕』166ページ。
(28) 同。
(29) イプセン（Henrik Ibsen，1828－1906）。

れば，情に流される。日本には個人主義がない。集団主義である。集団に埋没・同化すれば生きて行けるが，個人を主張すると，生きて行きにくい。

漱石が同時期に書いていたのは，名作『坊っちゃん』である。主人公・坊っちゃんは，世間知らずなので，「坊っちゃん」なのだ。「意地を通せば窮屈だ」を，そこで書いている。坊っちゃんは，正義の人である。世間に埋没したくないし，自分が正しいと思うことをする。もちろん，坊っちゃんの考えや行動が必ずしも正しいことばかりではないが，少なくとも本人の坊っちゃんは，正しいと思っている。坊っちゃんは，世間をうまく泳ぎ渡る人ではない。だから彼は世間には，受け入れられない。そこでの世間とは，坊っちゃんが四国で勤務している中学校である。だから最後には，彼は四国を去らねばならないのだった。

登場人物の赤シャツは，言う。「……学校と云ふものは中々情実のあるもので，さう書生流に淡泊には行かないですからね。」ここで情実というのは，「世間」の中に理屈や論理とは異なった人間関係がある(30) ということを言っている。『草枕』の智とは，ここで言う理屈や論理である。

『草枕』の主人公・「余」（＝漱石）は，ヒロイン・那美さんを好意的に描く。その理由は，那美のモデルであった前田ツナが，実際に魅力的な女性であったからかもしれない。しかしそれだけではなさそうである。前田ツナは，そして小説の那美もそうだが，出返り（でがえり）である。つまり離婚して実家に戻ってきた身であった。漱石はその彼女に好意を持ったし，彼女も漱石を好いた。才気あふれ，自由闊達に生きている女性の姿に，漱石は近代個人主義を感じたのだった。画工（＝漱石）は，人々の那美にたいするあらゆる非難に同意していないのである。

漱石文学では，実は，女性が大きなトピックとなっている。『草枕』でも，女性が大きなトピックとなっている。だが本質的なテーマとはなっていない。

---

(30) 阿部，190ページ。

一見そう見えるが，女性は本質的テーマではない。ヒロイン那美が芸術の対象としてなりたち，したがって画けると画家が悟ったのは，小説の最後の場面の那美の表情であるが，それは那美という女性の表情でなくてもよいのである。画の対象が男性であっても構わないからである。『草枕』では，女性でなく芸術が本質的テーマになっている。『坊っちゃん』でも，赤シャツと，うらなり君とによる，マドンナの争奪が，一つの大きなトピックである。ただし重要なトピックスの一つではあるが，本質的なテーマではない。坊っちゃんの生き方が本質的テーマである。しかし，『こころ』では，友人の愛した女性を主人公が奪ったので，女性が大きなトピックである。『それから』では，人妻を奪って，結婚したのであるから，これも女性が本質的トピックである。

漱石はさて，小説『こころ』では，倫理的に自我を裁いた。主人公の「先生」が友人に先駆けて女性を手に入れ結婚したことに，「先生」は悩み，結局は自殺するのである。個人主義の持つ自我の側面を，漱石は否定的に見ていたのである。

漱石は，代表作としては『それから』で，近代個人主義の地平を切り開いた。原理原則としては，漱石は個人主義を肯定する。三千代を他人＝友人から奪った主人公・代助を，漱石は非難していない。だが主人公は，今までの生活，つまり余裕を捨てて，就職をしなければならない。それに，当然であるが，誰も彼を援助してくれないのである。そして，日本では個人主義は育たない。だから，『門』では，他人の妻を奪った男が，世間の中で，ひっそりと暮らしてゆかねばならないことになる。

『草枕』冒頭の，「智に働けば角が立つ。」は，個人主義的に振る舞うと，日本ではカドが立つという人間世界の，あるいは世間の問題である。坊っちゃんが，そのいい例である。「情に棹させば流される」という世界も，日本の世間である。だから，「兎角に人の世は住みにくい」ことになる。この「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒両隣りにちらちらする唯の人である。」この，人の世で，「住みにくさが高じると，安い所へ引き越したくなる。」「唯の人が作った人の世が住みにくいからとて，越す国

はあるまい。」漱石は，人の世は住みにくいが，そこに住むのやめるわけには行かないというジレンマを，描く。この問題はどこの国でもあるだろうが，日本がとりわけそうなのであり，そのため，日本人には漱石の小説が好んで読まれるのだ。漱石が，日本人の心理的悩みを見事に衝いたからである。彼が国民的作家であるゆえんである。

続いて漱石は，「どこへ越しても住みにくいと悟った時，詩が生まれて，画が出来る。」(31)，と言う。だが，普通の人ではそういうわけにも行かない。誰でもが詩人でなく，画家でもないからである。では，市井の人，普通の人は，どうすればよいのだろうか。漱石は，後に，則天去私という思想を唱えた。私という自我の立場を去って，もっと高い天の立場に立つというものである。これは，『草枕』の芸術の成立ち，つまり「出世間」を，倫理・生活問題にあてはめたようにも受けとめられる。そしてカント（1724－1804）の『実践理性批判』のような，孔子（B.C. 552－479）の『論語』のような発想である。

漱石は，智・個人主義・正義と，情の世界・世間との対立を克服しようとした。それを小説の中で，もがきながら，表現した。なにしろ漱石が考え抜こうとした対象である「日本社会」は，近代的な前近代「社会」であり，あるいは前近代的なアジア的近代「社会」，個人主義の確立しきっていない「社会」であったからである。

むすび

漱石の考え方は，現代の人にも通ずる。あるいは現代人は漱石に学ぶべきである。それは，個性を大切にし，伸ばすこと，であり，これは現代思想である。そして，他国に，実際はヨーロッパに，かぶれる必要はないこと，である。ヨーロッパの近代の，民主主義，個人主義と，日本の思想とは，違っている。しかしながらこれは，どちらが良く，どちらが正しいというのでは

(31)『草枕』5ページ

決してない。ヨーロッパが進んでいて，日本が遅れている，というのでもない。ただ両者は対比的なのである。ヨーロッパにはもちろんすぐれた点はある。しかしヨーロッパを批判的に学びながら，それに追随せず，日本で，独自に，人のあり方を考えて行く。この，そういう漱石の態度を，現代人は受け継ぎ，考え続けるべきなのである。